玉川大学観光学部紀要　第2号　2014年，pp. 69～82

［研究論文］

フランス語における名詞形の呼称について

鈴木シルヴィ

要　約

フランス語の話し言葉で多用される*mon vieux*（直訳：「わが老人よ」）のような名詞形呼称は日本語に存在しないため，それに対応することばを見つけることは難しい。フランス語の名詞形呼称のニュアンスを日本語で正確に伝えるためには，まずそれらがどのような状況で使われているのかを明確にする必要があるだろう。

本稿では，発話の状況を考慮する前に，まずフランス語の名詞形呼称の全体像を把握することが先決であると考え，そのためにフランス語の名詞形呼称をコンテクスト抜きで分類することを優先課題にした。名詞形呼称の体系的な分類を手がけたKerbrat-Orecchioni, C.（2010）の成果を参考にしながら，よりいっそう網羅的な分類を目指した。

名詞形呼称には話し相手を直接呼びかける呼格的用法（vocative use）と他称詞の指示対象を指す三人称的用法（non-vocative use）があるが，本稿では前者に焦点を当て，呼格的用法におけるフランス語の名詞形呼称を整理し，分類した。名詞形呼称がどのような方法で対話者を同定するかによって，「固有名詞」，「ラベル」，「敬称」，「地位名称」，「関係語」，「愛称語」の6つのカテゴリーに分類することができた。その結果，ほぼどのカテゴリーにも所有形容詞一人称単数*mon/ma/mes*が登場することが判明し，さらに呼びかけ行為において所有形容詞が敬意，尊敬，親しみ，愛情など，多様な意味機能を果たしていることが明らかになった。

キーワード：名詞形呼称（FNA），呼格的用法，分類，同定，所有形容詞一人称単数

1. 本研究の目的

本研究の目的は，フランス語の名詞形呼称の用法を観察し，分類することにある。たとえばフランス語の*mon vieux*という呼びかけを日本語に訳そうと思うと，コンテクストによって対称詞「きみ」，「おっさん」，感動詞「やあ」などで表したり，または訳さないで文末のイントネーションで表現したりするなど，一定の対応表現を見つけることが難しい。このように日本語でニュアンスを伝えるのが難しいのは，フランス語の話し言葉で多用される*mon vieux*のような呼びかけ表現（これを本稿では名詞形呼称と呼ぶことにする）が日本語にほとんど存在しないからである。このような表現は，どんなにフランス語が堪能な日本人でもなかなか使いこなせないのである[1)]。本稿ではまず現代フランス語の名詞形の呼称を整理し分類する。

呼称には話し相手を直接呼びかける呼格的用法（vocative use）と他称詞の指示対象を指す三人称的用法（non-vocative use）[2)] があるが，本稿では前者に焦点を当てる。呼格的用法における呼称はフランス語文法書により用語が一定せず，apostrophe（頓呼法，呼びかけ法），vocatif（呼格），appella-

所属：観光学部観光学科　受領日　2015年1月13日

tif（呼びかけ詞）およびformes/termes/noms d'adresse（呼称）が用いられている。しかし，これらは全て同じ用法を示すので，呼格的用法の呼称に統一することにする。さらにフランス語の呼格的用法の呼称にはtoi/vousの代名詞形と*Monsieur*，*mon vieux*，*Docteur*などの名詞形があるが，本研究では後者を扱い，Kerbrat-Orecchioni（2010）に倣って，名詞形呼称（Formes nominales d'adresse略してFNA[3)]）と呼ぶことにする。

2. 先行研究

2.1. 呼称の発話行為論的・統辞的特徴

Perret（1970）によると，呼称は次の三つの性質を持っている。第一に，直示的性質（deictic property）がある。つまり，話者はある呼びかけを媒介にして対話者を指し示すことによって，指示対象（referent）である特定の対話者を同定（identify）できる。第二に,「明示的な」叙述的性質（predicative property）がある。叙述的性質といっても，ここでは文レベルの「叙述」が問題になるのではなく，呼称が局所的に指示対象への特徴づけや属性付与を行うということである。この叙述的機能は特に呼格的用法で使われる悪態語に顕著に表れるものである。第三にPerretは社会的関係を表す機能をあげている。つまり，呼称における話者と対話者との社会的関係が，親族名称などのように明示的に表現されていなくても，含意的に示されている。

統辞論的には，呼称は命題ではない文の付加部であり，文の叙述関係にとって副次的（marginal）な機能を果たしている。文中における呼称の位置は文頭または文末であり，文中に置かれることはない。たとえば，Marie, tu veux un bonbon? またはTu veux un bonbon, Marie? とは言えるが，*Tu veux, <u>Marie</u>, un bonbon? とは言えない。この例の中のMarieという呼称と同一の指向（co-enunciation）を持つ人称代名詞は必ず二人称tu（場合によりvous）でなければならない。Pierre, il vient? という例文では，Pierreは呼称ではなく，題目語になる。呼称は対話者の注意を喚起し，対話者と命題との間の関係を作ったり, 維持したりする。しかし, 呼称を含んだ文をそのまま間接話法にすることはできない。*Pierre m'a demandé si <u>Marie</u>, tu veux un bonbonの文は非文法的である。

2.2. フランス語の名詞形呼称の研究

呼称は単独で現れない限り発話文の構成に必要不可欠ではないため，伝統文法や統辞論において重要視されてこなかったが，多様な言語形式からなっており，対話者または指示対象を指すのに重要な役割を果たしている。

今まで，呼称代名詞tuとvousの使い分けの問題には社会言語学者を始め，多くのフランス語学者が関心を寄せてきたが，フランス語の名詞形呼称だけを対象とする体系的な研究はDétrie, C.（2006）とKerbat-Orecchioni, C.（2010）の本が出版されるまで極めて少なかった。Détrie（2006）は名詞形の呼称を人，物，観念などに呼びかける表現法であるapostrophe（頓呼法）の用語で扱い，統辞論的および発話行為論的な観点からの分析をしたものである。

一方，Kerbrat-Orecchioni（2010）はフランス語の名詞形呼称に関する共同研究であり，名詞形呼称（FNA）を語用論的および相互行為的な観点からまとめたものである。Détrieの研究は文学作品からの引用および政府機関などでのインタラクションの録音に基づいているのに対し，Kerbrat-Orecchioniの共同研究は呼称が使われる可能性の高いコミュニケーション状況におけるやりとりを録音し，データの分析を行っている。これら二つの研究の共通点は生の資料（documents authentiques）を利用して分析を行っていることである。

3. 呼格的用法におけるフランス語の名詞形呼称の分類

3.1. 分類の意義と方法

現代フランス語の名詞形呼称の全体像を把握するために，呼格的用法におけるフランス語の名詞形の呼称の分類を試みる。分類にあたっては，上記のKerbrat-Orecchioni（2010）[4] のほか，Charaudeau（1992），Le Goffic（1993），Achard（1982），Guigo（1991）の研究を参照する。

まず，どのような方法で対話者を同定するかによって，以下の六つのカテゴリーに分類した。「固有名詞」，「ラベル」，「敬称」，「地位名称」，「関係語」，「愛称語」である。さらに各カテゴリー内にいくつかの下位分類を設けることができた。呼称を表す言語形式を選ぶにあたって，主として上記の論文や文法書に出ている語例を引用するが，そのほかにフランス語母語話者である筆者自身の言語感覚による例を付加する。さらに語例のリストを数名のフランス人に見せ，インフォーマントのチェックを行い，もはや使われていない古めかしい表現であったり，筆者の家族特有の言い方であったりすると判明した呼称を対象から省くことにする。どの規準によってカテゴリーを立てるか，またどのカテゴリーにどの語例を入れるかという作業は困難なものである。たとえば，*garçon*（ボーイさん）を「地位名称」のカテゴリーに入れて良いか，それともKerbrat-Orecchioni[5] のように「職業名」のカテゴリーを新たに設けて入れるべきか規準があいまいであるが，社会的地位を表す名称として見なし，「地位名称」に分類することにする。また，愛情を込めた意味も持っている*ma Jeanne*は「愛称語」の「ポジティブな感情名称」として分類することも可能であるが，固有名詞によって相手を同定することから「固有名詞」のカテゴリーに入れる。性別，年齢，学歴などという発話者の属性や，親疎関係，年齢の上下差という話者と対話者との関係，そして声の調子や身振りなどによって意味が違うことは言うまでもないが，本研究では呼称が用いられる発話状況を考慮せずに，あらかじめ定義した各カテゴリーに合致するかどうかを規準にして，言語形式を分類する。

3.2. 固有名詞（les noms propres）

「固有名詞」のカテゴリーに入れた名詞形呼称は「固有名詞によって対話者を同定する」という定義に対応する1）～5）のものである。

1）名（prénom）

Jacques, Elisabeth...

2）所有形容詞and/or品質形容詞＋名

Grand Jacques, Petit Louis, Jeanne chérie, ma Jeanne, ma petite Jeanne...

3）姓（nom de famille）

Durand, tu（学校の男子生徒同士で）[6]

Durand, vous（年齢や地位が近い男性同士のみ。同じ身分かわずかな地位の差）[7]

4）名＋姓

Pierre Durand（点呼したり，親が子を叱ったりするとき。または著名な人の場合）

5）名または姓の縮小形から作られた愛称（diminutif）

名：*Jacquot*（Jacques）[8]，*Babeth*（Elisabeth），*Gégé*（Gérard），*Flo*（Florence）...

姓：*Sarko*（Sarkozy），*Mimi*（Mitterrand）...

2）ではpetitなどの形容詞や所有形容詞，5）では*Jacquot*の-otのような縮小辞や*Flo*のような縮小形があり，これらは親近感のニュアンスを込めることから愛称語のカテゴリーに入れることも可能である。しかし，固有名詞によって対話者を同定することから，「固有名詞」のカテゴリーに入れるこ

とにする。逆に固有名詞以外の方法で対話者を同定する*Basio, Choky, Pitet*[9]のようなあだ名（sobriquet）は「固有名詞」ではなく，「愛称語」に分類する。

3.3. ラベル（les labels）

「ラベル」という名のカテゴリーおよび語例の一部はKerbrat-Orecchioni（2010）から得たものである。ここでいうラベルは対話者を「人間の下位分類」に入れたり，または「際立った肉体的な特徴」によって指示したりして，タイプ分けを行う（labelling）ものである。「ラベル」のカテゴリーに入れた名詞形呼称にはこのような定義に対応する1），2）のようなものがある。

1）人間の下位分類

① 個人への呼びかけ

jeune homme, fillette...

② 集団への呼びかけ

les gars, les filles, les gosses, les enfants, les petits, Français, Françaises, citoyens, travailleurs...

2）際立った外見上の特徴

la blonde, le pull vert, la casquette, la clope, vous là-bas avec le sac en plastique[10] ...

「固有名詞」のカテゴリーに入れた固有名詞句*Grand Jacques*，または*Jacquot*というJacquesの縮小形はいずれもJacquesという名前の人に対してある程度持続的に使われるものである。それに対して，「ラベル」の2）であげた語例は，呼びかけている時点で目に入った対話者の特徴を指しており，臨時的に用いられるものである。

3.4. 敬称（la civilité）

*Monsieur, Madame, Mademoiselle*を総じて指す適切な用語がないため，ここではフランス語の申請用紙の記入項目で使われるcivilité（Monsieur/Madame/Mademoiselleを記入する欄）という用語のもとで，*Monsieur, Madame, Mademoiselle*またはそれらを含めた名詞句をまとめ，「敬称」のカテゴリーに入れることにし，1）～2）に分類する。

1）一般的な敬称（単独で使える。相手と面識があってもなくても使える。）

① 敬称（相手一人）

Monsieur（男性），*Madame*（既婚の女性），*Mademoiselle*（未婚の女性）[11]

② 敬称（相手二人以上）

Mesdames, Mesdemoiselles, Messieurs（講演や公式の演説の前で）

Messieurs-dames（上記ほど格式ばらない丁寧さが要求されるサービス業において）

m'sieurs-dames（市場や酒場において使われるくだけた言い方）

2）特定の相手を指す敬称

① ［敬称＋定冠詞le/la/les＋職名］

Monsieur le Maire, Madame la Directrice, Messieurs les Jurés ...

② ［敬称＋姓］

Monsieur/Madame/Mademoiselle Durand（近所に住んでいる者同士やお店の人が固定客に対して）

③ ［敬称＋名］

Monsieur Pierre（召使から大ブルジョアジーの子供，または売春婦のひもへ）

Madame Georgette（娼婦または娼家のおかみへ）[12]

3.5. 地位名称（Les titres hiérarchiques）

「地位名称」のカテゴリーに入れた名詞形呼称は「社会的な地位によって対話者を同定する」という定義に対応する，1)「肩書き呼称」と2)「階級呼称」である。

1）肩書き呼称

① 学位名

Docteur（医者），*Maître*（弁護士，競売吏，公証人など）...

② 役職名

patron（社長），*chef*（主任，シェフなど）...

③ 職業名[13)]

garçon（ボーイさん），*taxi*（タクシーの運転手さん）[14)]，*facteur*（郵便屋さん）

Maître/Maîtresse（幼稚園および小学校低学年の男の先生/女の先生）...

2）階級呼称

「階級呼称」の構成要素は「所有形容詞一人称単数mon＋名詞」,「名詞のみ」または「名詞＋姓」の三通りが基本的なパターンである。「階級呼称」を伴う所有形容詞は親族名称と同様に［(3.6.1)参照］，一人称単数mon/ma/mesのみで，皇族などに対する敬称のように二人称複数votreを伴うことはない［④参照］。

① 軍事組織の階級呼称

軍事組織の階級呼称の場合，所有形容詞と姓が交互に使われる。

表1　軍事組織の階級呼称における上下関係による使い分け[15)]

下位者から上位者へ[16)]	上位者から下位者へ	
mon＋階級呼称 例）*mon Général/mon Colonel/mon Lieutenant*	親しくない間柄	親しい間柄
	階級呼称＋姓 例）*Lieutenant Rivière*	階級呼称 例）*Lieutenant*

② 聖職者の階級呼称

表2　ローマ・カトリック信徒の聖職者に対する呼称[17)]

インフォーマルな関係　→→→→→→→→　フォーマルな関係

インフォーマルな関係	ややインフォーマルな関係	フォーマルな関係	極めてフォーマルな関係
名	*Père*＋名	*mon Père*[18)]	*Père*
若い話者から若い司祭へ	自分の小教区の司祭へ	司祭へ尊敬を込めて	年配の司祭や司教に対して

信徒は聖職者に対して尊敬を込めて*mon Père*と呼ぶが，聖職者は信徒に対して*mon fils/ma fille/mes frères, mes soeurs*と呼びかける（表3参照）[19]。

表3　ローマ・カトリック聖職者の信徒に対する呼称

mon fils/mes frères, mes soeurs *ma fille/frères et soeurs (bien aimés/de Saint Marc*[20]*)*

③　貴族の爵位

公爵（duc）を除き，爵位の前にMonsieur, Madame, Mademoiselleをつけてはならない。

表4　貴族の爵位

	公爵	侯爵	伯爵	子爵	男爵
男性	*Monsieur le Duc*	*Marquis*	*Comte*	*Vicomte*	*Baron*
女性	*Madame la Duchesse*	*Marquise*	*Comtesse*	*Vicomtesse*	*Baronne*

なお，フランスの王位継承権を主張しているパリ伯（le Comte de Paris）は④にあげる*Monseigneur*，パリ伯夫人（la Comtesse de Paris）は*Madame*と呼ぶのが慣習である。

④　皇族・王族・司教・枢機卿に対する敬称

Votre Altesse（支配王家の大公，「*殿下*」）

Monseigneur（司教，王位継承権を持つ大公）

Votre Excellence（大使）

Votre Sainteté（ローマ教皇）

Votre Éminence（枢機卿）

⑤　王・皇帝に対する敬称

Sire[21]*/Votre Majesté*（「陛下」）

⑥　キリスト教の神

Seigneur

3.6. 関係語（les termes relationnels）

上記3.5の「地位名称」のカテゴリーには，話者と対話者との間の上下関係や対話者の社会的地位を「呼んでいる」名詞形呼称をまとめたが，3.6の「関係語」のカテゴリーに入れた名詞形呼称は話者と対話者の対等な関係を表し，「血縁関係や友情関係などを表す語句によって対話者を同定する」という定義に対応するものである。

1）血縁関係

①　［所有形容詞mon/ma/mes＋親族名称］

・所有形容詞は義務的である。

mon fils/ma fille/mes enfants

・所有形容詞*mon/ma/mes*は任意である。

(mon) père, (ma) mère, (mon) oncle, (ma) tante, (mon) cousin, (ma) cousine

・［mon/ma＋親族名称］はくだけたことばと組み合わされない。

**mon papy/*ma mémé*

・次の複合語，*arrière grand-père, petit-fils, grand-oncle, petit-cousin* は呼称には使えない。

**mon arrière grand-père*

・［所有形容詞 *mon/ma/mes* ＋親族名称］の後に名/姓をつけられない。

**mon oncle Jean/*ma tante Dupont*

所有形容詞が親族名称の前に来た場合，敬意の度合いがより高くなる。

② ［親族名称＋名/姓］

・名は傍系血族の関係を表す名称につけられるが，姓の付加はまれである。

oncle Jean/tante Marcelle

・*papa/maman* の後に，姓をつける場合もある。

papa Dupont/maman Dupont[22)]

Achard（1982）は，呼格的用法におけるフランス語の親族名称を，話者と対話者との距離の度合いに応じて下記のように順序立てている[23)]。

表5　親族呼称における距離感―緊密表現から敬遠表現へ

インフォーマルな血縁関係＜インフォーマルな血縁関係＋名＜フォーマルな血縁関係＋名＜所有形容詞＋フォーマルな血縁関係＜フォーマルな血縁関係
(papa) (tonton)＜(tonton Jean)＜(oncle Jean)＜(mon oncle) (mon fils)＜(oncle) (père)

③ 親族名称の「話し言葉」的な用法

(mon) frangin（兄，弟）*/(ma) frangine*（姉，妹），*fiston*（息子）....

2）友情関係

camarade（労働組合員同士），*mon pote, mon (cher/jeune/pauvre) ami, mon cher/ma chère...*

3）その他の関係

cher collègue（同僚），*chers compatriotes*（同国人），*chers auditeurs*（聴取者），*mon Dieu*（神様）...

3.7. 愛称語（les termes affectifs）

「愛称語」のカテゴリーに入れた名詞形呼称は「感情名称によって対話者を同定する」という定義に対応する1），2）のものである。

1）ポジティブな意味の感情名称

このカテゴリーの愛称語は呼格的用法においてのみ用いられる。

(mon) bonhomme, mon vieux/ma vieille, (mon) chéri/(ma) chérie, mon garçon, ma biche, ma puce, mes chéris, (mon) chou, (mon) trésor, mon grand/ma grande, ma belle, ma petite chérie, ma petite dame, mon petit loup, mon gros loup, bichette, poulette, pupuce, fifille, mon salaud, mon cochon...

2）ネガティブな意味の感情名称

① 悪態語

salaud, cochon, petit con, imbécile, idiot, espèce de ～ ....

② 哀れみ

mon brave, ma pauvre dame, ma pauvre fille...

3）本人の特徴をつく，こっけいなあだ名（sobriquet）[9)]

Basio, Choky, Pitet ...

4. 分類の結果

以上，名詞形呼称がどのような方法で対話者を同定するか，また話者と対話者との社会的関係をどのように表すかという観点に立って，呼格的用法におけるフランス語の名詞形呼称（FNA）の分類を手がけた。各カテゴリーを定義するにあたり範囲を定めることが困難であったため，何度も検討を重ねた上で分類を行った。*ma Jeanne* のように二つのカテゴリーにまたがる呼称が存在することを避けられないが（3.1. 参照），この分類を行ったことによって現代フランス語の名詞形呼称の全体像を把握しやすくなったといえよう。

4.1. 所有形容詞を伴った名詞形呼称

フランス語の名詞形呼称の分類が出来上がった時点で一つの特徴に気付いた。それは3.3. の「ラベル」を除けば，3. で定めたどのカテゴリーにおいても所有形容詞一人称単数（adjectif possessif）[24] が登場することである。そこで，名詞形呼称の各カテゴリーにおいて所有形容詞がどのような形で出現するかを見てみよう。「固有名詞」の *ma* Jeanne，「敬称」の *Mon*sieur，*Ma*dame，*Ma*demoiselle，*Mes*dames，*Mes*sieurs[25]，「地位名称」の「軍事組織の階級呼称」の *mon* Général，*mon* Colonel，*mon* Lieutenant と「聖職者の階級呼称」の *mon* Père，*mes* frères，「関係語」の *mon* fils，*mon* oncle および「愛称語」の *mon* vieux, *ma* biche, *ma* pauvre dame, *mes* chéris などの例があげられる。ここで登場する所有形容詞 *mon*，*ma*，*mes* が持つ意味をカテゴリーごとに分析してみたい。なお，今回は *Votre Excellence*，*Votre Altesse* に見られる所有形容詞二人称複数と *les gars*，*la blonde*，*le pull vert* などに見られる定冠詞を分析の対象とはしない。

4.1.1. 固有名詞

「固有名詞」内で所有形容詞が使われているのは，1）「所有形容詞＋名」*ma Jeanne* と，2）「所有形容詞＋形容詞＋名」*ma petite Jeanne* の二つの語形である。*petit* と同じ範列関係にある形容詞 *cher* と *pauvre* を加えると，2）は「所有形容詞＋（∅/cher/pauvre/petit）＋名」の結合に従い，*ma Jeanne*，*ma chère Jeanne*，*ma pauvre Jeanne* と *ma petite Jeanne* の固有名詞句になる[26]。この場合の所有形容詞は何らかの情意的意味（valeur affective）を持っている。

4.1.2. 敬称

Monsieur，*Madame*，*Mademoiselle* は古フランス語の *mon sieur*，*ma dame*，*ma demoiselle* という「所有形容詞＋名詞」の接着の結果，語彙化した名詞句である。既に所有形容詞を含んでいることから所有形容詞をさらに前に付加することはできない（cf. **mon monsieur*，**ma madame*）。現代フランス語において，*Monsieur*，*Madame*，*Mademoiselle* は相手に対する敬意，尊敬の念を込めた呼びかけで，その中の *mon*，*ma*，*mes* は擬固（figement）の要素の一つであるにすぎず，中世時代の意味はほとんど残っていない[27]。

4.1.3. 地位名称

「地位名称」の中で, 所有形容詞を伴う呼称は階級制や位階制のある「軍事組織の階級呼称」と「聖職者の階級呼称」の中の一部である。

「軍事組織の階級呼称」*mon Général* 類の *mon* は下位者が上位者の地位に対して払うべき敬意を表しているのと同時に，下位者の自分自身の階級が下位であることの認識を表している（Détrie 2006:

59)。また，Charaudeau（1992: 208）は，「« **mon** capitaine »を独占的な所有（possession exclusive）としてではなく，*私に対して権威を持ち，また私が従属している大尉*として理解すべきである（強調，斜体は原文どおり）」と述べている。このように「軍事組織の階級呼称」に先行する*mon*が敬意のほかに，下位者の上位者に対する従属の認識の表れである。

「聖職者の階級呼称」*mon Père*についても，Charaudeau（1992: 208）は「*人類の父の代表で，私に対して信仰上の権威を持ち，私が信仰上従属している人*として解釈できるであろう（斜体は原文どおり）」と指摘している。要するに上記の*mon Général*類と同様に下位者の上位者に対する従属の認識の表れである。その他に，*mon Général*類と*mon Père*の*mon*は同一の大きな集団への帰属意識を表していると思われる。軍隊の場合，それが軍事組織であり，また教会の場合それが聖職者と信徒の擬似的な家族関係である。司祭の信徒に対する呼称*ma fille*，*mon fils*の*mon*も同じ信仰上の家族（famille spirituelle）への帰属意識の表れである。

4.1.4. 関係語

関係語の分類3.6.1）のように血縁関係の場合，様々な結合上の制限がある。*mon oncle*，*ma cousine*のように*mon*が親族名称の前に来た場合，話し相手と「フォーマルな血縁関係」で結ばれることを意味する。それと同時に同じ親族への帰属意識の意も含む。しかし，現代フランス語においては，自分より上の世代に対して名前で呼びかけることが主流となっており，「mon＋親族名称」はほとんど使われなくなった。呼びかけ語として現在でも残っているのは司祭と信徒を結ぶ擬似的な血縁関係においてである。*mon Père*，*mes frères et soeurs*，*mon enfant*，*mon fils*等の例があげられる。また，*mon frangin*，*ma frangine*というくだけた親族名称の場合，*mon/ma*は愛情（affection）を込めたニュアンスを含んでいる。3.6.2）の友情関係の*mon pote*もそれと同じ用法になる。一方，3.6.2）の*mon (cher/jeune/pauvre) ami*，*mon cher/ma chère*における所有形容詞はフォーマルな友情関係を表している。口調やコミュニケーションの状況にもよるが，*mon jeune ami*などは目上の紳士があえてフランクな呼称を用いることで目下の者に対して親しみを示す表現である。

4.1.5. 愛称語

愛称語の分類3.7.1）「ポジティブな意味の感情名称」の前に，所有形容詞がかなり高い確率で使われている。基本的な意味は愛情（amour, affection）であるが，他のカテゴリー以上に口調や状況によって，また後続する単語によって，意味が変わりうる。たとえば，Alors, *mon bonhomme*, on dit pas bonjour?「なんだ，坊や，挨拶しないのかい？」とÇa, *mon bonhomme*, tu me le paieras!「おい，このお返しはさせてもらうぜ」という*mon bonhomme*の二つの用法であるが，前者は年下の人に対して教訓めいたニュアンスを含んでいるが，後者になると，それが脅しになっている。また，本稿の冒頭で例にあげた*mon vieux/ma vieille*は前から知っている人に対して親愛を込めて使うくだけた呼称である。相手の年齢よりも，付き合いの長さが関係しており，若者同士でもよく使われている。親愛の情を強めるために女性形が男性に，また男性形が女性に対して用いられることもある。次に，*mon chéri, ma biche*などの親愛語（hypocoristique）は無数に存在し，造語も多い。3.7.1）のカテゴリーの「ポジティブな意味の感情名称」はどれも対話者に優しく触れる行為に値することばであり，反対に3.7.2）の①「悪態語」は対話者を精神的に傷つけることばである。しかし，*salaud*（ばか野郎）や*cochon*（薄汚ないやつ，ひきょう者）にmonがつくと，悪態語ではなくなり，多くは羨望または愛情を込めた非難［réprobation（souvent mêlée d'admiration ou d'affection）］の意味になる[28]。*mon salaud*や*mon cochon*のような表現が使えるのは，対話者同士で仲間意識（complicité affective）があることが前提で

ある。3.7.2）の②のようにmonの後にbraveやpauvreの形容詞がつくと，対話者に対する哀れみの感情を示す表現になる。

以上，名詞形呼称に先行する所有形容詞一人称単数の様々な意味をカテゴリーごとに見てきたが，まとめると次のようになる。敬意，尊敬，下位者の上位者に対する従属の認識，大きな組織や集団への帰属意識（自国の軍隊の連隊・同じ信仰上の家族・同じ親族），フォーマルな血縁関係，フォーマルな友情関係，愛情，親愛，脅し，非難である。このリストは決して網羅的ではないが，上記の考察の結果，所有形容詞が極めて多様な感情を表すことが可能であることがわかる。対話者との社会的・心理的距離が大きい場合の敬意や従属の認識から，距離が小さい場合の愛情や怒りまで，親疎の度合いや上下関係を問わず所有形容詞が生起しうることがわかる。

次に，3. で作成した名詞形呼称の分類において，限定詞（所有形容詞，定冠詞）を伴わない名詞句をカテゴリーごとにまとめ，考察していきたい[29]。

4.2. 限定詞を伴わない名詞形呼称

1）固有名詞　①姓　*Durand*　②名＋姓　*Pierre Durand*

2）ラベル：*jeune homme, fillette* など

3）敬称　*Monsieur, Madame, Mademoiselle* など

4）地位名称：肩書き呼称　①学位名　*Docteur, Maître* など　②役職名　*patron, chef* など
③職業名　*garçon* など

5）関係語　*camarade*

6）愛称語　①悪態語　*salaud, cochon* など

上記の分類から二つの特徴が浮かび上がった。一つめは*jeune homme*, *Docteur*, *Maître*, *patron*, *chef*, *garçon* のような例では，話者が対話者を，あるグループを代表する一人の人間として指し示すことである。この場合，名詞が限定詞を伴わない理由としてあげられるのは，*jeune homme*, *Docteur* などのように呼びかけるときは，jeunes gens，médecins という共通の特徴を持った類への潜在的な指示（référence virtuelle）が無意識的に行われる可能性が強いからだと Détrie（2006: 62）は分析している。二つめは，悪態語*salaud*，*cochon* のように，話者が肉体的・精神的特徴を示す名詞で対話者を同定する場合も，限定詞を伴わないことである。

所有形容詞monなどをつけることによって，話者を呼格的用法の名詞句に組み入れ，呼びかけられる対話者に関連付ける［Détrie（2006: 56）］。反対に所有形容詞がつかないと，話者は呼格的用法の名詞句に組み入れられることなく，対話者ともっと「冷めた」関係になる。しかし，所有形容詞がついてもつかなくても，Perretが指摘する直示的性質，叙述的性質および社会的関係を表す機能が存在する（2.1参照）。

5. まとめと展望

本稿で明らかにした名詞形呼称の全体像からわかるように，フランス語の名詞形呼称は語形が豊富で，またその用法がかなり細かいルールに従っている。呼称が*Docteur* のように単独で使われるか，*Monsieur le Maire* のような呼称同士の結合によるものなのか，それとも *les petits*, *mes petits*, *mes chers petits* のように呼称が定冠詞，所有形容詞，形容詞などとの組み合わせによるものなのか，様々な結合上のルールがある。本稿では所有形容詞の用法と意味に注目したが，*chéri*/*mon chéri* のような所有形容詞の有無による意味の違い，定冠詞と所有形容詞の違い，また所有形容詞における敬意と親密さ

の関連など，解明すべき課題が多く残っている。

先行研究が少ないこともあり，今回は名詞形呼称の統辞論的および発話行為論的な研究に入る前に，まずフランス語の呼称体系を概観することが先決であると考えた。そのため発話状況を考慮に入れず，各言語形式を文脈から切り離して扱った。しかし，冒頭であげた*mon vieux*のような呼称の意味を分析し，和訳するためには，生のデータを使い，それが使われたコミュニケーションの状況を把握する発話行為論的なアプローチが求められることは言うまでもない。また，フランス語の所有形容詞に関する統辞論的研究は数多くあるが，名詞形呼称における所有形容詞の働きに注目した研究は極めて少ない。本稿で手掛けた分類によって，この課題が明らかになった。このことを踏まえ，今後の研究につなげることが必要である。

注

1）Mizubayashi Akira（2011: 164–167）

2）フランス語で« délocutif »（非在対象）とも言う。「ダムレットJ. Damourettetとピション E. Pichonの述語で，コミュニケーションの行為に参加していない人や，話の対象となっている物や観念を指す人称である（第三人称）」J. デュボワ他著（1973）『ラルース言語学用語辞典』大修館書店，p. 334．参照。

3）Kerbrat-Orecchioni, C. (dir.)（2010: 9）

4）ibid.（2010: 20–23）

5）ibid.（2010: 20）

6）Guigo（1982: 52）

7）ibid.

8）かっこ内に入っているのは元の名や姓である。

9）あだ名の語例はFranche-Comté地方Doubs県のChamesol村で現在使われるものである。*Basio*は背が小さい（bas）からつけられた。また，*Choky*はチョコレートが好きな人で，*Pitet*はpuis tu esが口癖だそうである。

10）Kerbrat-Orecchioni（2010: 21）

11）Achard（1982: 39）によると，*Monsieur, Madame, Mademoiselle*は*Monseigneur, Sire*を軽減した形式（formes atténuées）である。

12）Achard（1982: 41）

13）Kerbrat-Orecchioniに倣い「職業名」には特別なカテゴリーを充てないで，職業の*garçon de café*や*maître d'école*という社会的地位で「呼ぶ」名称としてみなし，「肩書き呼称」に分類した［Kerbrat-Orecchioni（2010: 20）］。

14）呼称としての*taxi*はタクシーの運転手を指すもので，換喩として使われる。

15）Achardの分析をもとに作成した表である［Achard（1982: 34）参照］。

16）所有形容詞*mon*はもっぱら下士官から士官に対して使われるが，下士官の中で唯一*mon*をつけて呼ばれるのは曹長（adjudant）と主任曹長（adjudant-chef）である（cf. *mon Adjudant*）。軍人の階級呼称の前にくる*mon*は*Monsieur*を意味すると，教育を受ける新兵は伍長に教わるようである。また礼儀作法の本にもそのように書かれている（Caracalla 2011: 135）。フランス革命以前は全ての士官は貴族で，階級呼称ではなく，*Monsieur*と呼ばれていた。ちなみに，女性の軍人に対しては*mon*をつけない。*mon Général*の英，伊，独語の対応語を見ると，*mon*が*Monsieur*を意味するという説に頷くことができる。英語では*General/Sir*，イタリア語では*Generale*，ドイツ語では*Herr General*のように所有形容詞がつくことがなく，しかも

英語とドイツ語では*Monsieur*に匹敵する*Sir*と*Herr*がそれぞれ階級呼称の前に使われる。なお，海軍の士官に対しては所有形容詞が使われない。*Amiral*（上級大将殿），*Commandant*（艦長殿），*Capitaine*（大佐殿）と呼ぶのが慣わしである。

17）この表であげているのはカトリック司祭に対する親族名称からなる呼称だけであるが，その他に教区（diocèse）内司祭の呼称として*Monsieur l'Abbé*と小教区（cure）を管轄する主任司祭の呼称として*Monsieur le Curé*という呼称もある。どちらも名前を知らない異なる教区の司祭に対して使われている傾向が強い。*Monsieur le Curé*は手紙の宛名など，肩書きを明確にしながら敬意を表する必要があるときは依然として使われるが，*Monsieur l'Abbé*は現在はあまり使われなくなったようである。

18）本来は*mon Père*（ファーザー）は叙階を受けて修道司祭になっている人に対する呼称である。また，女子修道院長に対する呼称は*ma Mère*となっている。なお，従軍司祭は*Padre*または*mon Père*と呼ばれる。

19）所有形容詞は*père, mère, oncle, tante, cousin, cousine*の場合任意であるが，*fils*（*fille*）の場合，義務的である［Achard (1982), p. 33参照］。つまり，*fils*（*fille*）は単独で使えないということである。

20）Saint Marcは小教区の名前である（cf. paroisse Saint Marc）。

21）古フランス語では*Sire*は単数の主格で，*Seigneur*は単数の斜格で，範列関係にあった。*Sire, Seigneur, Sieur*の由来についてはまだ不明な点が残っている［Lagorgette（2006: 105）］。

22）筆者の両親がそれぞれの義理の親に対して実の親と区別して，「*papa/maman* + 姓」と呼んでいた。

23）Achard（1982: 33）

24）フランス語の所有形容詞は英語の人称代名詞の所有格myに相当するものであり，一人称では*mon*（男性単数），*ma*（女性単数），*mes*（複数）と変化する。後続する名詞に限定を与える機能を果たしていることからdéterminant possessif（所有限定詞）とも呼ばれている。

25）*monsieur, madame, mademoiselle, mesdames, messieurs, monseigneur*は語彙化した名詞句で，古フランス語の*mon sieur, ma dame, ma demoiselle, mes dames, mes sieurs, mon seigneur*の接着によって生まれたもので，monが造語成分として含まれている。

26）「固有名詞」のカテゴリー3）「姓」の場合は**mon Durand*が非文法的で，形容詞としては*pauvre*や*petit*よりも*cher*のほうが受容度が高い［*(mon) cher Durand*］。また，4）「名＋姓」の場合は所有形容詞の用法自体が非文法的である（**mon cher Pierre Durand*）。5）の「名または姓の縮小形から作られる愛称」では1）と2）と同様に「所有形容詞＋（cher/pauvre/petit）＋名」の結合が可能である（*mon petit Jacquot*，*ma chère Babeth, mon pauvre Gégé*）。

27）フランスの封建制社会において，臣下は主君に対して忠誠を誓い，個人として主君と契約関係（engagement personnel）で結ばれている。主人（seigneur）の妻であるdameに対して，所有形容詞のmaをつけることによって，その主従関係が強調される［Montandon（1995：198）］。現代フランス語の*Madame*（*Monsieur/ Mademoiselle*）における敬意や尊敬の意味は，封建時代からの名残であると言えよう。

28）Cf. *Trésor de la langue française Dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe siècle* CNRS Tome onzième Gallimard 1985, p. 986.

29）呼称の前に不定冠詞や不定形容詞は絶対につかない。また，指示形容詞を伴う呼称の例はまれである［Détrie（2006: 60）］。

参考文献

ACHARD, P.（1982）« Au nom du père-Ebauche du système anthroponymique français » *Langage et societé*, 22, 25–45.

CARACALLA, L. (2011) *Le Savoir-vivre pour les nuls*, Paris, First-Gründ.

CHARAUDEAU, P. (1992) *Grammaire du sens et de l'expression*, Paris, Hachette.

CURCIO M. (1981) *Manuel du Savoir-Vivre aujourd'hui*, Paris, Tchou.

DETRIE, C. (2006) *De la non-personne à la personne: l'apostrophe nominale*, Paris, CNRS Éditions.

GUIGO, D. (1991) « Les termes d'adresse dans un bureau parisien », *L'Homme*, Vol. XXXI No. 119, 41–59.

HEINZ, M. (2003) *Le possessif en français. Aspects sémantiques et pragmatiques*, De Boeck. Duculot.

KERBRAT-ORECCHIONI, C. (1992) *Les interactions verbales*, Paris, Armand Colin.

KERBRAT-ORECCHIONI, C. (dir.) (2010) *S'adresser à autrui: les formes nominales d'adresse en français*, Université de Savoie, coll. "Langages".

LAGORGETTE, D. (2006) « Quelques pistes pour une étude diachronique des titres en français: monsieur, monseigneur, milord », *Langue française*, 2006/1 No. 92–112.

LE GOFFIC P. (1993) *Grammaire de la phrase française*, Paris, Hachette.

LEROY, S. (2004) *Le nom propre,* Paris, Ophrys.

MIZUBAYASHI, A. (2011) *Une langue venue d'ailleurs*, Gallimard, collection « L'un et l'autre ».

MONTANDON, A. (1995) *Dictionnaire raisonné de la politesse et du savoir-vivre, du Moyen Âge à nos jours*, Paris, Seuil.

PERRET, D. (1970) « Les appellatifs. Analyse lexicale et actes de parole » *Langages* 17, 112–121.

（すずき　シルヴィ）

An attempt to classify the nominal forms of address in French

Sylvie GILLET-SUZUKI

Abstract

As nominal forms of address such as *mon vieux* (literally, “my old man”) which are often used in the French spoken language do not exist in Japanese, it is difficult to find a corresponding word. In order to convey the correct meaning of a French nominal form of address in Japanese, it would first be necessary to determine which situation it is being used in.

In this article, however, it was thought that before taking into account the situation of communication, an overall view of the nominal forms of address in French would first be required and therefore, the forms were classified detached from their contexts. While referring to the results of Kerbrat-Orecchioni’s (2010) systematic classification of the forms of address in French, this study aimed at a more exhaustive classification.

Nominal forms of address include vocative use when directly addressing the listener and non-vocative use when referring to the referent as a third person. In this article, the former was focused on and these nominal forms of address were put in order and classified. They were classified into six categories according to the way in which the forms of address identify the listener: 1) proper nouns, 2) labels, 3) titles of respect, 4) hierarchical titles, 5) relation terms and 6) affective terms. As a result, it was found that the possessive adjective of the first person singular - *mon*, *ma*, *mes* - was present in almost every category, and moreover, it became clear that the possessive adjective had various meanings including deference, respect, friendship or affection.

Keywords: nominal forms of address, vocative use, classification, identification, possessive adjective first person singular